斜影はるかな国

逢坂剛

斜影はるかな国

逢坂剛

朝日新聞社

斜影はるかな国

平成三年七月一日　第一刷発行

著　者　逢坂　剛

発行者　木下秀男

印刷所
製本所　凸版印刷

発行所　朝日新聞社

〒104―11　東京都中央区築地五ノ三ノ二
☎〇三―三五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替・東京〇―一七三〇

©Go Osaka 1991 Printed in Japan

ISBN4-02-256309-5

・定価はカバーに表示してあります

斜影はるかな国＊登場人物＊

龍門二郎……東和通信社・特報部の記者
龍門三郎……二郎の父親
龍門和美……二郎の母親
西村洋助……和美の父親
西村静子……和美の母親

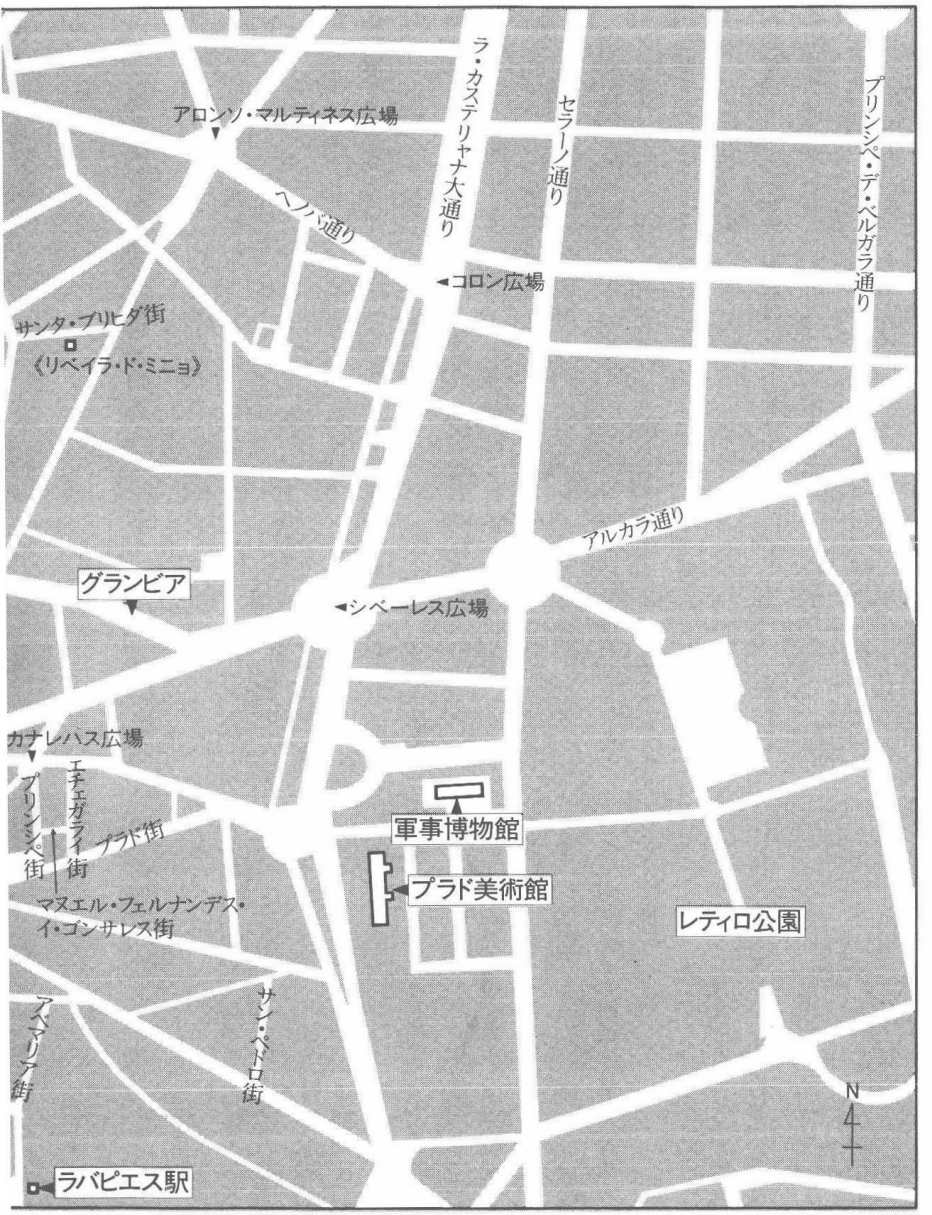
海馬廉三……東和通信社・専務取締役・編集総局長
荒木仁……東和通信社・特報部長
海馬希和子……広告会社全同・会長。海馬廉三の義母
浜野信雄……全同・取締役・国際局長
冠木千夏子……フリーライター。元全同・国際局勤務
国枝晴一郎……元外交官

花形理絵……明央大学助教授。マドリードに留学中
風間新平……マドリード在住のフラメンコ・ギタリスト
新宅春樹……全同・マドリード駐在員事務所長

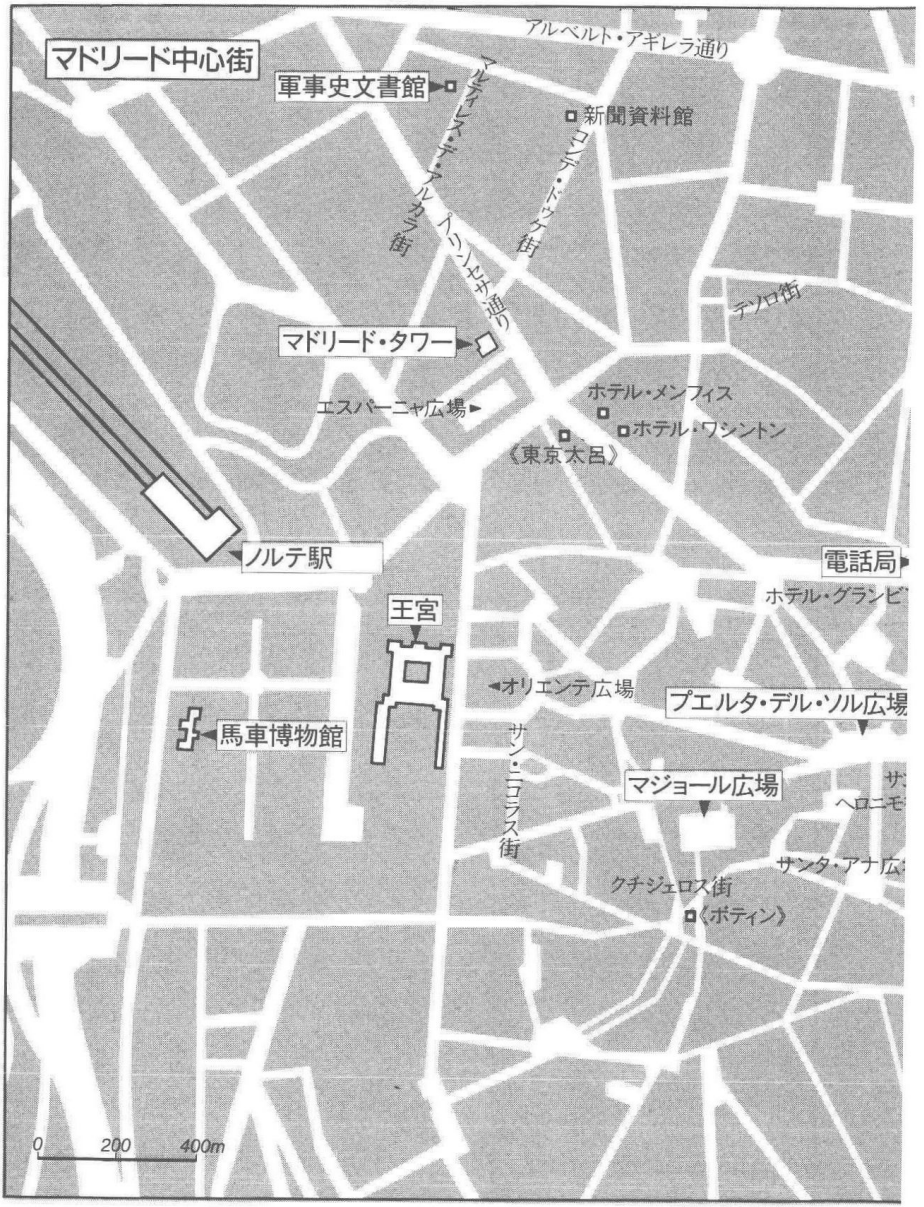
フリアン・イバラギレ……コンプルテンセ大学講師
クレメンテ……治安警備隊・少佐。反テロ特捜隊（CEIAT）の隊長
バルボンティン……クレメンテの部下
マタロン……暗殺者
ミゲル・ポンセ……新聞記者
ホアキン・エレディア……ジプシー。フラメンコの歌い手
ミハイル・ジャボーチン……ソ連大使館・二等書記官
ハシント・ベナビデス……ロンダ・ピレータの洞窟の管理人。ギジェルモの元戦友
パキート……ベナビデスの助手

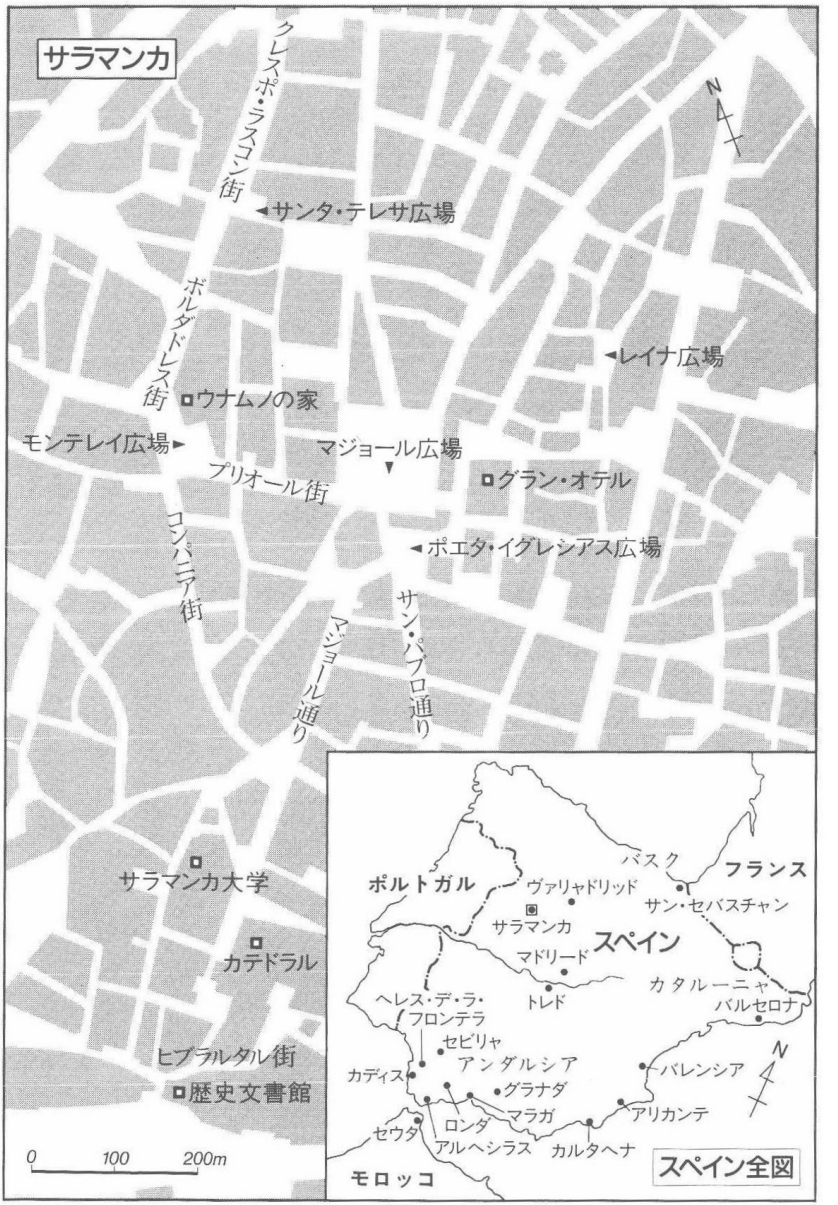
ギジェルモ……スペイン内戦の日本人義勇兵
リカルド……同
マリア……同
キリコ……リカルドとマリアの戦友
オルロフ……NKVD（現KGB）の幹部
ボロンスキー……オルロフの部下

ドナルド・グリーン……ロンドンの古書籍商
レオノラ……ドナルドの母親



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


マドリード中心街
アルベルト・アギレラ通り
軍事史文書館
新聞資料館
アルカラ街
コンデ・ドゥケ街
イソンセサ通り
デソロ街
マドリード・タワー
ホテル・メンフィス
エスパーニャ広場
ホテル・ワシントン
《東京太呂》
ノルテ駅
電話局
ホテル・グランビ
王宮
オリエンテ広場
プエルタ・デル・ソル広場
馬車博物館
サン・ニコラス街
マジョール広場
ヘロニモ
サンタ・アナ広
クチジェロス街
《ボティン》
0
200
400m


サラマンカ
クレスポ・ラスコン街
サンタ・テレサ広場
ボルダドレス街
レイナ広場
ウナムノの家
モンテレイ広場
マジョール広場
プリオール街
グラン・オテル
コンパニア街
ポエタ・イグレシアス広場
サン・パブロ通り
マジョール通り
サラマンカ大学
カテドラル
ヒブラルタル街
歴史文書館
0
100
200m
N
ポルトガル
バスク
フランス
ヴァリャドリッド
サン・セバスチャン
サラマンカ
スペイン
マドリード
カタルーニャ
トレド
バルセロナ
ヘレス・デ・ラ・フロンテラ
セビリャ
カディス
アンダルシア
バレンシア
グラナダ
マラガ
アリカンテ
セウタ
ロンダ
アルヘシラス
カルタヘナ
モロッコ
スペイン全図

斜影はるかな国

装画・堀越千秋

AD・多田　進

プロローグ

花形理絵はシェリーを飲み干した。
「そろそろ行かなくては」
それを聞くとフリアン・イバラギレは、濃い眉をぴくりと動かして、いかにも不満そうに言った。
「まだ早いじゃないか。これから本格的に飲もうというのに」
イバラギレは、理絵が通うマドリード・コンプルテンセ大学の、バスク文学講座の非常勤講師だった。
「スペインではともかく、日本ではもう寝る時間ですから」
「郷に入っては郷に従えさ。あと一時間だけ付き合いたまえ」
理絵とイバラギレは、マジョール広場の下にある居酒屋《エル・バンディード》にいた。この界隈はマドリードでも有数の飲み屋街として知られ、夜遅くまで市民や観光客で賑わっている。現にこの店もすでに夜中の一時過ぎだというのに、横向きにならなければカウンターに並べないほど立て込んでいた。
しかしイバラギレが、なれなれしく理絵に体を押しつけてくるのは、混雑だけが理由でないことくらいよく分かっている。新しいおもちゃを見る子供のような目の輝きは、大学の講師が通常の聴講生に示す関心の度合いを、はるかに超えるものだった。

「あしたも早起きしなければいけないし、もう失礼します」
「しかしこの前もきみは、口実を作って――」
イバラギレは急に口をつぐんだ。
理絵の肩越しに戸口の方を見る。その目にちらりと警戒の色が浮かんだ。
ここ何度か付き合ううちに、しばしばイバラギレはなんの前触れもなく、不安げにあたりを見回すことがあった。
おそらくそれが原因で理絵は、イバラギレと食事をしたり酒を飲んだりすることに、ある種のうとましさを感じ始めていた。どんな理由があれ、落ち着きのない男は嫌いだった。
「楽しかったわ。ガボン（おやすみなさい）」
バスク語で別れを告げ、カウンターを抜けて戸口へ向かう。
ちょうどだれかが出て行ったらしく、木の扉がしまるところだった。一瞬黒いコートの裾がひるがえるのが見える。
そのあとを追うように、理絵はジャケットの襟を立てて外へ出た。
快い微風が頬を打つ。十月も半ばを過ぎると、夜半だいぶ気温が落ちるはずだが、今年はなぜか空気が生暖かい。
無意識にあたりに目を走らせたが、たった今出て行ったはずの人影らしいものは、どこにも見当たらなかった。気のせいだったのだろうか。
歩き出すと、イバラギレがあとを追って来た。
「送って行くよ」
「だいじょうぶ、歩いても十二、三分の距離ですから」
「こんな夜中に、女一人で街を歩くつもりかね。近ごろのマドリードは昔とは違うんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「昔って、フランコ時代のことですか」
理絵がいくらか皮肉を込めて言うと、イバラギレは少し間をおき、ぶっきらぼうに答えた。
「そうだ、フランコ時代だ。当時は確かに、治安だけはよかった。まだ三角帽子（治安警備隊）がのさばっていたからね」
フランシスコ・フランコ将軍は、今からおよそ半世紀前の一九三六年七月に、ときのスペイン共和国政府に対して反旗をひるがえした。ヒトラー・ドイツとムソリーニ・イタリアの後押しを受けたフランコは、足かけ四年にわたる内戦をへてスペイン全土を制圧する。
当然のように、カタルーニャやバスクの地方自治権は剝奪され、標準語にあたるカスティリャ語以外の地域言語は、厳しく使用を制限された。
しかし一九七五年秋、フランコ総統が死亡して三十六年間にも及ぶ独裁政治に終止符が打たれると、スペインは一転して自由主義体制への脱皮を図り始めた。新たに国王の座についたホアン・カルロスは、卓抜した指導力によってつぎつぎと祖国の民主化、自由化を実現していった。
主要な地方の自治権も回復され、独自の言語の使用が認められるようになった。一九八二年秋以降は、フェリペ・ゴンサレス首相の率いるＰＳＯＥ（社会労働党）が政権を担当し、国王のもとで穏健な社会主義路線を歩んでいる。
理絵は相手を見ずに言った。
「バスク人の血が騒ぐのでしょう」
イバラギレは歩きながら両手を広げた。
「時代は変わった。今ではバスクも自治権を獲得したし、バスク語だって自由に使えるようになったんだ」
「でも相変わらずＥＴＡ（バスク祖国と自由）は、独立を求めてテロを繰り返していますね。フランコ

時代そのままに」
　イバラギレは後ろを振り返り、静かな口調で応じた。
「中央政府がどう変わろうと、バスク人の最終目標は自主独立にある。バスクが人類学的にも言語学的にも、スペインとまったく異なる国であることは、きみもよく知っているはずだよ」
　イバラギレは国という言葉を使った。
「それはそうですが、だからといってテロ行為が許されることにはならないでしょう」
「あれはテロではない。戦争なんだ。バスクとスペインの」
「ＥＴＡの爆弾闘争や誘拐殺人を支持するのですか」
「バスク人ならだれでもＥＴＡの活動に共感を覚えるはずだ」
「そうでしょうか。バスク人がそれほど流血を好む民族とは思えませんね。バスクの議会でもＥＴＡを支持しているのは、ＨＢ（ヘリ・バタスナ党）だけだと聞いていますが」
　イバラギレはまた後ろを振り返り、溜め息まじりに言った。
「日本人のような単一民族に、われわれ少数民族の気持ちは分かるまいね」
　イバラギレは理絵より二つ三つ年上の、三十代半ばの誇り高いバスク人だった。大学で講義するときも、居酒屋で酒を飲むときもバスクの話しかせず、文学、美術、音楽、すべての話題がバスク一色に塗りつぶされている。
　それでいて政治の話だけは、これまで注意深く避けてきたように見えた。イバラギレがこういう話題に応じるのは、考えてみれば初めてのことだった。
　理絵は暗い空を仰いだ。
　日本人が単一民族かどうかは別問題として、バスクやカタルーニャに住む人びとの心情を、真に理解できる自信はなかった。

二人は人影の少なくなったマジョール通りを、マドリードの中心街プエルタ・デル・ソル広場の方に向かって歩いた。車の行き来はまだかなり多い。通りの反対側で、パンク・ルックの若者が数人、手拍子を打ちながら踊っている。

理絵が借りているピソ（賃貸マンション）は、プエルタ・デル・ソルからサン・ヘロニモ通りへはいり、カナレハス広場を右に曲がったプリンシペ街にあった。そのあたりは、かならずしも治安のいい地域とはいえないが、いわゆる下町の雰囲気が理絵の好みに合っていた。

私費留学でマドリードへ来てから、もう半年近くになる。

それまで理絵は、東京のある大学でスペイン語を教えていたが、事情があって休職届を出し、何年ぶりかでスペインへやって来たのだ。スペイン語をもう一度勉強しなおすとともに、この国の現代文学や内戦史の研究を進めるのが目的だった。

歩きながらイバラギレが言った。

「恋人がいるのかね、きみには」

唐突な質問に、理絵はたじろいだが、すぐに答えた。

「います」

「スペイン人かね」

「日本人です」

「マドリードにいるのか」

「いいえ、東京に」

イバラギレは笑った。

「ビスタティク・ウルン、ビオツェティク・ウルン」

それは前に教わったバスクのことわざで、《去る者は日々にうとし》という意味だった。

理絵が黙っていると、イバラギレは続けた。
「恋人が、たった今ここにいないということは、どこにもいないのと同じことだ。その男よりぼくの方が、断然有利な立場にいると思わないかね」
理絵はイバラギレの押しつけがましい口調に、ちょっと鼻白んだ。恋人がいるにせよいないにせよ、この男を恋愛の対象として考えたことはなかったし、これからもない。
「バスクではどうか知りませんが、日本人の女性はどこにいても恋人に忠実なのです」
自分でも歯が浮きそうになりながら、理絵はそう答えた。
イバラギレはまた振り返り、闇をすかして見た。それから理絵の腕をとらえて言う。
「バスクの女性は夜中に男性に送ってもらったとき、家に招き入れて酒を一杯ごちそうする習慣があるんだ」
「信じられませんね。もしそれがほんとうなら、バスクの男性は丸太割り競技なんかで、エネルギーを無駄使いしたりしないはずです」
きっぱりと言い、腕を振りほどく。
ようやくカナレハス広場まで来た。イバラギレがまた腕をとらえようとする。
理絵はそれを嫌って言った。
「そこを曲がってすぐですから。アグル（さよなら）」
イバラギレはあきらめずに追って来た。理絵は足を速め、プリンシペ街にはいった。
借りているピソは角から三十メートルほど先の、一階に毛皮屋のはいった建物の上にある。マドリードではここ数年車の数が急激にふえ、この通りにもずらりと片側駐車の列ができている。
「待ってくれないか、リエ。このままさよならはないだろう」
「アグル」

もう一度別れの言葉を投げつけ、理絵は石畳の上を急いだ。ずうずうしいイバラギレにも、そんな男に付き合った自分にも、腹をたてていた。
背後にイバラギレの靴音が響き、理絵は肩を引きもどされた。
驚いて向き直る。
「何をするの。やめてください」
「どうしたんだ、リエ。そろそろ大人の付き合いをしてもいいころじゃないのかね」
そう言いながらイバラギレは肩をつかみ直し、理絵をかたわらの歯医者の玄関のくぼみに押し込んだ。
「やめてください。声を出すわよ」
怒りのあまり頭に血がのぼる。大学での軽妙洒脱な講義の進め方からして、イバラギレがこのような振る舞いに及ぶ男だとは思わなかった。
「かまわんよ。恋人同士の痴話喧嘩だと思うだけさ」
イバラギレは息をはずませ、理絵を壁に押しつけると、無造作に顔を寄せてきた。
アルコールの臭いがぷんと鼻をつく。背は高くないががっちりしており、小柄な理絵の力ではいくらもがいても、とうてい逃れられる相手ではなかった。
荒い息が頬をかすめ、ぬめりとした唇が押し当てられる。理絵は必死に顔をそむけた。
「やめて」
肘を張ってイバラギレを押しのける。
「どうしたんだ、リエ。ぼくがきみを好きなことは分かっているはずだ。今さら逃げるのはきみらしくないぞ」
イバラギレは理絵を抱きすくめ、ぼってりした舌で耳たぶをなめ始めた。

理絵は頭をイバラギレの顎の下にこじ入れ、体を押し離そうとした。イバラギレはますます腕に力を込めた。

無我夢中で相手の足を踏みつける。しかし理絵の靴は平底で、なんの効果もなかった。首を振って逃れようとする理絵の唇を、イバラギレは執拗に追い続けた。

理絵は死に物狂いで顔をのけぞらせ、膝でイバラギレの股間を思い切り蹴り上げた。

イバラギレはうめき声を漏らし、体を硬直させた。太い指が肩に食い込む。理絵は苦痛のあまり歯を食いしばった。

イバラギレはそのまま理絵にもたれかかってきた。重い体と堅い壁にはさまれ、理絵は身動きが取れなかった。

突然相手の腕が緩んだ。肩をつかんだ指の力も抜ける。

予想以上の膝蹴りの効果に驚きながら、理絵はイバラギレの体を強く押しのけた。イバラギレはあっけなく後ろへよろめいた。

びっくりしたような顔で、理絵を見つめる。黒い瞳が街灯の明かりを受けて、死んだ魚のように光った。

ゆっくりと石畳に膝を落とす。手が何かを探るように、脇腹をかきむしった。

そのままの姿勢で、イバラギレは前へ倒れ込んだ。はずみで頭が石畳にぶつかり、すいかを落としたような音をたてた。

理絵は息を止め、背後の壁にへばりついた。何が起こったのか分からなかった。

イバラギレの背中に黒いものが突き立っている。

よく見るとそれはナイフの柄だった。イバラギレは膝蹴りで倒れたのではなかった。

理絵は反射的にあたりを見回した。人影はない。まるで闇が凶器を振るったようだった。ぞっとす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com